

カワサキノコト

Colors,Future! いろいろって、未来。



川崎市ブランドメッセージ

Colors, Future!

いろいろって、未来。

多様性は、あたたかさ。多様性は、可能性。

川崎は、1色ではありません。

あかるく。あざやかに。重なり合う。

明日は、何色の川崎と出会おう。

次の100年へ向けて。

あたらしい川崎を生み出していこう。



川崎市

令和6(2024)年7月1日 川崎市は市制100周年。

この歴史的な節目は「あたらしい川崎」を生み出していくスタートライン。

多くの人が行き交い、多様な文化が根付き、新しいものに寛容な風土がもたらした「多様性」こそが川崎の発展の源泉。

「Colors, Future! いろいろって、未来。」

本市のブランドメッセージにあるように、川崎は1色ではありません。

これまでも多彩な「色」が重なり合うことで、さまざまな価値が生み出されてきました。多様性を認め合い、可能性を育み、新たな価値が生み出されていくまちへ。

あたらしい川崎を生み出していこう。

INDEX

02 Introduction

特 集

06 かわさきフュージョン

14 川崎のキセキ

24 川崎ミライ予想図 20XX

30 WE LOVE KAWASAKI

36 かわさきいろいろ5・7・5

40 多摩川 Rediscovery Map

44 駅から見る川崎「史」

52 かわさきトリビア

56 川崎の12カ月

62 キャラクター大集合！

市 勢 要 覧 2 0 2 4

64 川崎市総合計画

70 クイズでもっと知る 川崎ってどんなまち？

74 年表でみる川崎の歴史

80 名誉市民・市民文化大使・川崎市歌・川崎市民の歌など

MESSAGE

令和6(2024)年、川崎市は市制100周年という歴史的な節目を迎えました。

人口約5万人から始まった川崎市は、154万人を擁する大都市に成長し、多彩な魅力を持つ都市として、今なお成長を続けています。その発展の礎となっているのは、新しい人々や文化を温かく受け入れ、変化に寛容な風土によって育まれてきた「多様性」であり、これからもその価値を大切に、皆さまと共有しながら、次の100年へとつなげていきたいと思っています。

この記念誌では、川崎が誇る多彩な魅力を掲載しています。多くの方に改めて川崎を知って、関わって、好きになっていただくきっかけとなれば大変うれしく思います。

市制100周年にあたり、これまで川崎の発展に寄与されてきた全ての方に感謝申し上げるとともに、これからの100年も皆さまと一緒に「あたらしい川崎」を生み出してまいります。

川崎の未来づくりを、さあいっしょに。

川崎市長 福田 紀彦

川崎市制100周年という大きな節目を、市民の皆さまと共に迎えることができ、大変うれしく思います。

川崎市は、大正13(1924)年の市制施行時、人口約5万人、市議会の議員は30人でスタートしました。この間、先人の方々がつないできた100年という歩みは、人口154万人、市議会の議員60人という、成熟した大都市へと変貌を遂げた川崎市の成長の歴史です。そして、これまでいつの時代においても市議会は行政と一体となって、より良い環境を整えてまいりました。

今、100周年の節目を迎え、市民の皆さまと共に、100年間の先人の功績に想いを馳せながら、次の100年にどのような街をつくっていくかを想像することが大切だと思っています。この記念誌がそのきっかけとなれば幸いです。

川崎市議会は、これからも皆さまと共感し、共に歩む議会として、次の100年の川崎の未来づくりに取り組んでまいります。

川崎市議会議長 青木 功雄

若者文化 × アート

ブレイキン自分を表現するアートと語るAmi、ブレイキンはアートに近いと語るShigekixと、社会に挑み、自らの信じる生き方を作品を通して発信し続けた岡本太郎のアートは、人々に驚きと勇気を与える川崎の魅力です。



B-Boy Shigekix (半井重幸)

大阪府出身。7歳の時にブレイキンを始める。Kids B-Boy シーンで頭角を現し、11歳で世界大会に挑戦。世界大会を総ナメし、唯一無二の存在に。2018年ブエノスアイレスユースオリンピックにて銅メダルを獲得。2020年Red Bull BC One World Finalにて最年少で優勝、世界一に。これまでに47回の国際大会にて優勝を経験。

かわさきフュージョン

あなたが思う川崎の魅力は何ですか?その答えはきっと、人それぞれ。川崎は、さまざまな人・モノ・コトが共存し、混ざり合い、融合(フュージョン)しながら形作られてきた、多様性のまちです。そんな川崎を象徴する方々にインタビュー。これまでの挑戦の歩みとともに、川崎への思いやまちの魅力、そして、これからの川崎を創っていく若い世代に向けたメッセージを語っていただきました。

岡本太郎「月の顔」

「芸術は、爆発だ!」などの言葉や、EXPO'70の「太陽の塔」、渋谷駅の「明日の神話」で有名な岡本太郎は、川崎市出身の芸術家。「太陽」のイメージが強い岡本だが、「太陽」と対と考えられる「月」をモチーフにした作品も制作している。「月の顔」は、正面から見ると満月、横から見ると三日月に見える形の効果が面白い作品で、現在は市役所本庁舎で展示中。



B-Girl Ami (湯浅亜実)

埼玉県出身。小学1年時に、現在Good Foot Crewでともに活躍中の姉・Ayuの影響でヒップホップを始め、10歳の時にブレイキンにのめり込む。2018年にはRed Bull BC Oneで初代女王に。翌年の第1回WDSF世界ブレイキン選手権で優勝を果たし、確固たる地位を築く。2023年のRed Bull BC Oneで2度目の優勝を勝ち取った。



好きなことを見つけて、挑み、楽しんでほしい。

私は中学生の頃からブレイキンの聖地・溝口に通って練習をしていて、大学卒業後、川崎市に引っ越してきました。レベルの高い仲間たちから刺激を受けながら練習できますし、市として若者カルチャーをサポートしてくれているので、より練習環境が整って、自身の成長につながりました。最近では2023年に「Red Bull BC One」という重要な大会で優勝することができました。コンディションはよくありませんでしたが、楽しむことを意識することでそれを乗り越え、最後まで踊りきれたこと、そしてそれが優勝という結果につながったことは、次に生かせるいい経験になりました。日頃から掲げている「目の前のことに全力で挑む」という目標の通り、今年も一日一日の練習を大切に、小さな成長を積み重ねていきたいです。これからの川崎を担っていく皆さんには、ぜひ好きなことに取り組んでほしいです。私は運よくブレイキンに出会いましたが、「これをずっとやっていきたい」と思えるようなことに巡り合うのってなかなか難しいと思います。まだ見つかっていない人は自分が好きなことは何なのか探してほしいし、すでに見つけている人はとてもラッキーだと思うので、楽しむことも忘れずに、それに全力で挑んでみてください。

熱中する若者を全力で支え、後押ししてくれるまち。

僕は大阪府出身で、高校を卒業してから川崎市に拠点を移しました。プロとしての練習環境を整えられたのはもちろん、ブレイキンの普及活動をしていくためにも良かったと思います。今は朝起きたらすぐ多摩川沿いでランニングもできますし、海外遠征も多いので羽田空港にアクセスしやすいのは結構うれしくて。川崎に戻って来ると自分のホームに帰ってきた感覚があります。そんな環境のおかげもあり、自分のペースを保って挑めた2023年のアジア大会では優勝、パリ五輪の切符を勝ち取ることができました。新たなスタート地点に立ったわけですが、プロセを含めて自分らしさを大切に挑戦したい。自分らしいパフォーマンスができれば必ずいい結果がついてくると信じています。

僕から若い皆さんに伝えたいのは、とにかく自分が熱中できる、夢中になれるものを見つけてもらいたいということ。やりたいことを見つけた環境として川崎には機会があふれていますし、いざやりたいとなったら情報や場所だけでなく、後押ししてくれる人もいます。きっと若者を全力で応援してくれるまちだと思うので、好きという気持ちを大事に全力で頑張ってもらいたいと思います。

音楽 × 宇宙

想像の幅を与えてくれる、表現豊かな歌詞が持ち味の sumika は、「分かっていることがほんの数パーセントしかない宇宙は、想像の幅を許してくれる領域。こうであってほしいなという願いを託していい場所だと思う」と語ります。そんな sumika の音楽と、「かわさぎ宙(そら)と緑の科学館」のプラネタリウムで見る満天の星は、人々の心を癒やし、感動をもたらす川崎の魅力です。

かわさぎ宙(そら)と緑の科学館

生田緑地に立地する、市内唯一の自然科学系の登録博物館。自然、天文、科学の3分野において、資料の収集保存、展示、調査研究、教育普及に取り組んでいる。館内に有するプラネタリウム設備は、市出身のプラネタリウムクリエイター大平貴之氏が開発したもので、世界最高クラスの星空を楽しむことができる。



sumika

神奈川県川崎市出身バンド。映画・ドラマ・CM など数々のタイアップソングを手がけており、「川崎市成人の日を祝うつどい」(2018年)に出演の他、市内でのライブや、川崎プレバサングの応援ソングを担当するなど、市内での活動実績は多数。2022年9月からはかわさぎスペシャルサポーターを務める。sumika [camp session] 名義で、アコースティックバンド形態でも活動。



変わっていくもの。
そして、変わらないもの。

—— 荒井智之(Dr/Cho)・右

かわさぎスペシャルサポーターに就任してから、より川崎のいいところを知ろうと入ったことのないお店や場所に行くことが増えました(笑)。川崎の魅力は新しいことにチャレンジする一方で、変わらないことを大事にしているところです。僕たちも、新しいことや変化を恐れずにチャレンジしながら、昔から大切にしてきたものは守っていくことを意識して活動しています。川崎とsumikaは深いところでリンクしているような気がしますね。これから川崎は、さらに発展して便利なまちになっていくと思います。人間味のある、温かい部分は受け継いでいってほしいです。僕たちも人が向き合うことを大切にしているバンドであり続けたいと思うので、皆さんも、ぜひ同じ気持ちで、これからも一緒に進んでくれたらいいと思います。

一度失敗したって、
そこで終わりじゃない。

—— 片岡健太(Vo/Gt)・中央

川崎は、それぞれの個性や生き方を尊重し、変化を受け止めてくれる寛容なまちだと思います。

sumikaは、メンバーそれぞれにうまくいかなかった過去があり、それでもう一度だけ夢を信じてやってみようと思ったバンドで、エリートは一人もいません。

だから僕たちは、一度失敗したって終わりじゃないことを体現するバンドでありたい。sumikaを育てくれた川崎という場所から、僕らなりに頑張っている姿と音楽を届けていきますので、一緒に頑張ろうと思ってくれたらうれしいです。うまくいかない時は、空を見上げてみてください。宇宙はとも大きくて、未知のことばかり。想像するとワクワクしますし、多少の失敗なんて大したことはないと思えて、悩みが少し軽くなるはずです。

これからも川崎に、たくさんの
「しおり」を挟んでいきたい。

—— 小川貴之(Key/Cho)・左

川崎は遊びも食も自然もあって本当に充実したまちです。都市报でありながら、ここ生田緑地のような豊かな緑もあるので、気分次第で遊んで楽しむことも、リラククスすることもできて、過ごしやすいと思います。僕は、川崎での思い出を数えきれないほど持っています。高校時代、男友達4人で餃子を200個食べたことや、sumikaとして活動してきたことなど。その都度忘れないように心に「しおり」を挟んできました。これからも川崎のまちで、「しおり」を挟んでいけたらと思います。僕の目標はとにかく「続けていくこと」。やめたらそこで終わりですが、続けた人しか見えない風景があるはず。その答えを、音楽を通して皆さんに届けていきたいです。

川崎フロンターレ麻生グラウンド

サッカーJ1リーグに所属する川崎フロンターレの練習グラウンド。丘陵の見晴らしの良い場所に立地し、自然の中に造られた傾面スタンドから、選手たちの激しく洗練された練習を見学することができる。



スポーツ × まちの力

かつて「プロスポーツ不毛の地」と称されたまちで、ゼロから歩みを始めた川崎フロンターレ。その中核となり、ピッチ内外で汗を流し続けた中村憲剛。

ひたむきに活動を続ける彼らに応えるように、まちがチームを応援し、チームがまちを盛り上げる。

地域に根ざしたスポーツはいまや、川崎を代表する魅力のひとつです。



©KAWASAKI FRONTALE

中村憲剛

2003年に川崎フロンターレに入団後、現役引退まで18年間所属。Jリーグ通算546試合出場、83得点を記録し、J1優勝3回、2016年Jリーグ最優秀選手賞受賞。日本代表として2010年南アフリカW杯出場。現在は川崎フロンターレのFrontale Relations Organizer、Jリーグ特任理事を務める他、サッカー指導や解説など活動は多岐にわたる。

**川崎の皆さんと共に
チームも自分も成長してきた。**

2003年にフロンターレに入って、川崎で過ごすようになり、まず緑が多いなと感じたことを覚えていません。外から見ていただけの頃は、イメージが変わりました。僕が入団した頃は、まだチームの知名度が低く、これから地域と一緒に創り上げていこうという段階だったので、地域やサポーターの人たちとの距離がとても近くて。彼らとたくさん関わる中で、僕の中の川崎への思いが強くなっていきました。川崎の皆さんと一緒に優勝したい、川崎の皆さんを日本一にしたいという気持ちもどんどん大きくなっていきましたが、気持ちが大きくなればなるほど、勝ち切ることができず。何度も2位になり、悔しい思いをしました。そうした経験をしてきたからこそ、2017年に初めてJ1リーグ優勝を成し遂げた時は、長年積もった思いがあふれて、ピッチに突っ伏し、大号泣してしまいました。振り返ると川崎の皆さんと一緒にだったから頑張ったとこれら、皆さんに応援してもらえなかったから、ここまで強く成長することができたと感じます。川崎市とフロンターレの協力体制のおかげで、一緒にまちを盛り上げることができて本当に感謝しています。

**立ち止まって構わない。
でも自分の可能性にふたをしない。**

川崎は頑張る人の背中をグッと押してくれるまちなので、思い切って自分の好きなことにまい進してみてください。たまたま、しんどかったり、壁にぶつかった時は立ち止まってもいいと思います。中学1年の時、僕は体が小さく足も遅くて、やりたいサッカーができなくなり、チームに所属しない時期が半年ほどありました。その時に一度自分を受け入れて、望む自分になるために何が強みで何が弱みか、自分を知ることの大切さを学びました。結局サッカーへの思いが再燃して今に至るのですが、あの時無理をしていたら僕はここにはいないと思います。順風満帆で最後まで突き抜ける人なんていません。落ち込んだとしても、まずはうまくいかないことが当たり前だと受け入れてみてください。僕はうまくいかない時は自分に要因があると考えていて、壁にぶつかりながらその都度這い上がるすべを養ってきました。自分の可能性にふたをしてしまうか、それとも価値を高めていけるか、考え方ひとつで大きく変わっていくと思うんです。川崎には、スポーツや文化芸術など何を目指しても受け入れてくれる場所がある。これからも若い人が挑戦できるまち、そして大人たちがそれを包み、バックアップしてあげられるまちであってほしいです。

挑む人 × 応援するまち

川崎には、夢に向かって挑戦する人があふれている。
大学から始めた音楽の道で世界へ挑戦し、たゆまぬ努力で
道を切り開いてきたやまだ豊も、かつて川崎の地で学んだ一人。
多様な人々を受け入れ、応援する風土は、川崎の魅力の
ひとつです。

洗足学園音楽大学

高津区にキャンパスを構える私立の音楽大学。
2024年に学園創立100周年を迎える。常に時代や社会を見据え、既成の概念にとらわれない学校づくりを目指し、クラシックはもとより、ジャズやロック・ポップス、ミュージカルなど新たな音楽領域まで、幅広い教育フィールドを整えており、Saori (SEKAI NO OWARI)、平原綾香、三谷卓美など幅広いジャンルで活躍する卒業生を多数輩出している。



やまだ豊

洗足学園音楽大学卒業。2011年ドラマ「マルモのおきて」にて劇伴作曲家としてデビュー。その後活躍の場を広げ、TVアニメ「東京喰種トーキョーグール」で世界的に注目される。2017年からロサンゼルスを拠点とし、2020年日本アカデミー賞優秀音楽賞受賞。近年は映画「キングダム」シリーズ、実写ドラマ「幽☆遊☆白書」など話題作を手がける。



■Netflix『幽☆遊☆白書』
© Y.T.90-94
Netflix シリーズ
「幽☆遊☆白書」
Netflixにて独占配信中



■映画『キングダム 大将軍の帰還』
2024年7月12日(金)公開
©原泰久/集英社
©2024映画『キングダム』
製作委員会

青春を過ごした地・川崎には
思い入れがありません。

僕は洗足学園音楽大学に通った4年間、溝口やその周辺で過ごしました。大学時代の一番の思い出は、自分でオーケストラを作ったことです。学内だけでは演奏家がそろわず、東京音楽大学や東京芸術大学、国立音楽大学、昭和音楽大学など周辺の大学にも足を運んで人を集め、大学の前田ホールや高津市民館で演奏会を開きました。大学から音楽を学び始めて間もなかった当時の僕は慣習を知らず、普通は遠慮してしまうようなところに突っ込んで無謀なお願ひばかりしていました。結果的にはそれが良い方に転じて演奏会まで実現できてよかったです。他には、川崎フロンターレの応援に行くゼミに入っていたことも覚えています。楽器が演奏できる学生は楽器で応援をするのですが、僕はできなかったので、サポーターの方々と一緒に声を使って、応援歌で応援していました。等々力陸上競技場に老若男女が駆けつけ、まちをあげて応援する雰囲気がいいですよ。僕にとって川崎は、青春のほとんどを過ごしたまちで、ホームという感じがする、思い入れの強い場所です。2016年に川崎市アゼリア輝賞をいただき、2020年に日本アカデミー賞・優秀音楽賞を受賞した時にお祝いのご連絡をいただきました。2017年から海外に拠点を移しまし

たが、遠く離れた今でもこうして「縁」を大切にしてくれることがうれしいです。

どこまで行っても、自分次第。

僕から皆さんに伝えたいのは、やりたいことを見つけて全力で取り組んでほしいということ。僕は今、アメリカに住んでいるのですが、本当に自由で、何をしても周りに何か言われることはありません。でも日本では、周りの人が応援してくれる。これって恵まれたことだと思えます。アメリカでは、生まれた場所によって越えられない高い壁があるように感じますが、日本は音楽、スポーツ、勉強など何をやるにも環境が整っている、自分さえ頑張れば可能性が広がっていく。その先には世界もあります。僕も日頃の作曲活動で、頑張ったら頑張った分だけいい音楽ができていけると思っています。一つ一つのことに全力で取り組むことで道が開けてきました。僕は幸運にも、先生や友人、作品など数多くの出会いに恵まれてきて、世間で知られるような映像作品に携わらせてもらっていますが、もし仮に巡り合わせが違って、大きな作品に携わっていなかったとしても、自分自身は全力で頑張ってきたと言い切れるので、幸せではあったと思います。どこまで行っても自分次第。皆さんもまずは今の環境で、100%の力で頑張って、未来を切り開いてください。



川崎のキセキ

私たちの住んでいる川崎は、どんな道をたどってきたのでしょうか。その軌跡には、多くの人の情熱と未来への希望がありました。先人たちの努力によって時代とともに変化し、発展を遂げてきた川崎は、今なお成長し続けています。発展の軌跡を「産業」「環境」「文化・芸術」「スポーツ」の分野で振り返ります。

令和4(2022)年12月撮影 臨海部から川崎を望む

江戸時代 にぎわいを生んだ川崎宿

かつての川崎は、多摩川流域や多摩丘陵地などに緑が広がる自然豊かな土地でした。江戸時代、江戸を中心に街道の整備が進み、交通網が発達しました。東海道はその中でも特に重要な街道でした。東海道の起点となる日本橋から2つ目の宿場である「川崎宿」は、元和9(1623)年に六郷の渡しに設けられました。最盛期には川崎大師への参拝者や旅行者の昼食や休憩のための中継点として多くの人が往来し、にぎわいのある場所となりました。さまざまな人や物が行き交い、多様な文化が育まれ、現在の川崎の発展へとつながったのかもしれない。

多摩川から取水して市域を流れる二ヶ領用水は、慶長16(1611)年に竣工した我が国多数の古い農業用水です。江戸時代に稲毛領と川崎領にまたがり開削されたことに、その名は由来します。網目のように設けられたこの用水を中心に地域共同体が形成され、川崎市の骨格をつくり上げました。

明治以降 臨海部に京浜工業地帯が形成

明治に入ると、川崎には近代化の波が押し寄せました。明治末期から大正にかけて、町をあげた工場誘致が進められ、今の川崎駅西口エリアに多くの工場が進出しました。また、この頃から埋め立て事業も開始され、臨海部に大手企業が進出し、一大工業地帯が形成されていきます。

これにより全国各地から多くの労働者が集まりました。人口の増加にともない上水道の整備を行い、大正10(1921)年に戸手浄水場が完成します。その後、関東大震災を経て、大正13(1924)年7月1日、川崎町と御幸村、大師町が合併して川崎市が誕生しました。

戦後・高度経済成長期 豊かな暮らしを育む政令指定都市へ

昭和20(1945)年、川崎大空襲により川崎の工場群や中心地は焼け野原となり、その後、戦災復興を経て、高度経済成長期を迎えます。川崎の臨海部では、埋め立て地の造成がさらに行われ、石油化学などの重化学工業が集積しました。この臨海部をはじめ、市内の製造業などが日本の経済をリードしていきま

す。急激な経済成長や開発の一方で、公害問題が表面化したことから、市は環境問題に取り組みとともに、市民生活を優先したまちづくりを進めました。

高度経済成長による景気の拡大は、市民の暮らしも変えていきます。川崎駅周辺には多くの映画館が建ち並び、まちはたくさんの人々ににぎわいました。また、昭和27(1952)年に川崎球場が完成し、多くの観客を集めました。

戦前から長い伝統をもつ各種文化団体も活動を再開し、昭和28(1953)年にはさまざまな団体が一緒になり、川崎市文化協会が誕生しました。その後も、スポーツ、文化・芸術資源や交通・物流の利便性を生かして、川崎は力強く発展を続けています。

日本のものづくりの発展を、川崎の飽くなき挑戦が支えている。



日本のものづくりのエンジン、京浜工業地帯の誕生

臨海部が工業地帯へと変貌
大正初期、浅野総一郎により当時の田島村近くの海岸で埋め立てが始まり、工業用地にする動きが活発化します。川崎の臨海部は、資材や製品の運搬にも本線から分岐させた専用の線路を工場に引き込むことが可能となり、物資の輸送はもちろん、従業員の通勤としても利用されました。さらに東京と横浜の中間に位置し、工場としては最適の立地でした。当時の川崎町は積極的に企業誘致を行い、多くの会社が工場を建設。臨海部に工業地帯が形づくられていきました。
高度経済成長の原動力として
大正3（1914）年に第一次世界大戦が起きると、輸出の増大によって国内産業が発達。特に重工業が飛躍的に伸び、京浜工業地帯の一角を担う川崎も大きく成長していきました。そして大正13（1924）年に市制に移行し、神奈川県下3番目の都市として川崎市が誕生しました。
京浜工業地帯は太平洋戦争で壊滅的な被害に見舞われるものの、戦後、製鉄所や発電所、石油化学などの集積が進み、再び目覚ましい発展を遂げます。その後も京浜工業地帯は、高度経済成長期をリードする役割を果たし、日本の産業の発展に大きく貢献しました。



昭和40年代の川崎の臨海部
提供：川崎市市民ミュージアム

新時代の科学と技術を育む「新川崎・創造のもり」

研究開発拠点の形成
1960年代、現在の新川崎駅周辺には「東洋一の操車場」と呼ばれた「新鶴見操車場」がありました。最盛期には1日5千両もの貨物列車を操車していたといわれ、産業を支える大動脈として活躍しました。
1990年代末から、かつての役目を終えたその跡地を、21世紀を支える新しい科学や技術の開発拠点として、また新たな産業の創出や次世代を担う子どもたちの夢を育む場として、産学官の連携によって「新川崎・創造のもり」として整備。新時代をリードする産業集積地として新たな展開を見せていきます。
「新川崎・創造のもり」を中心に、量子技術に関わる人や情報が集い交わる産学官の共創拠点「量子イノベーションパーク」の実現に向けた取り組みを推進。素材、パイオ、半導体などの既存技術と最新の量子技術を融合させて新たな産業を生み出すとともに、その担い手である次世代の人材を育成する場としてさらなる発展を続けています。



新川崎・創造のもり

目指せ！未来のイノベーター／次世代人材育成プログラム
川崎市は、将来の産業界を担い、世界で活躍できる若者を育てる活動を積極的に行っています。例えば、小・中学生向けのアントレプレナーシップ(起業家精神)教育プログラムや、高校生を対象とした量子ネイティブ人材の育成プログラムなどを開催。高度化する新技術に対応し、未来を主体的に切り開くスキルを身につけた人材の輩出を目指しています。

未来を創造する国際戦略拠点

世界最先端の研究開発を展開
羽田空港の対岸に位置する殿町地区にある「キングスカイフロント」は、世界最高水準の研究開発から新産業を創出するオープンイノベーション拠点です。
その中核機関である「ナノ医療イノベーションセンター(iCONM)」は、平成27(2015)年に開設。高分子サイズの「スマートナノマシン®」が体内を24時間巡回し、病気の予兆の発見、診断、治療までを行う先進医療システム「体内病院」の実現を目指し、最先端技術の開発に取り組んでいます。



羽田空港の対岸に位置するキングスカイフロント

世界の英知が臨海部に集結
また、高度な技術を備えた人材をさらに呼び込み、研究成果を早期に社会に送り出すためのイノベーション(起業や事業創出)をサポートする活動もスタート。iCONM内のシェアラボでは、世界有数の起業家の支援などを行うイノベーションと連携し、キングスカイフロントで育ったスタートアップ企業が、世界へと羽ばたく道を切り開いています。

世界に直結する研究都市へ
さらに令和4(2022)年には「多摩川スカイブリッジ」が開通し、対岸にある羽田空港とその周辺の大規模複合施設「羽田グローバルウィングズ」と直結。それぞれの特色を生かし、機能を分担・連携させることで相乗効果を高め、世界に向けた新たな価値を創造する拠点として、さらなる成長を加速させています。

産業観光をはじめ、多彩な活動で都市を活性化

光輝く観光資源「工場夜景」
京浜工業地帯の中央に位置する川崎臨海部には多数の工場が密集し、夜になるとさまざまなプラントに作業用の明かりが灯ります。この明かりが生み出す「工場夜景」は10年以上にわたり、国内外の観光客の心をつかんでいます。さらにこのような流れから、企業と連携して工場見学を取り入れた観光ツアーを実施するなど、産業観光の取り組みを進めています。



第63回川崎市観光写真コンクール優秀賞「仲秋、桃色に染まる」内田景梧

多様な食の祭典「川崎夜市」
市の玄関口であり、首都圏有数の商業地である川崎駅周辺エリアは、多様な食文化が息づいています。令和4(2022)年から、このエリアで開催している「川崎夜市」では、地元の名店が軒を並べる屋台市場



食と音楽の融合で新たな夜の魅力を発信する「川崎夜市」

や大規模なほしこ酒イベントなどが催され、多くの来場客を集めています。今後も川崎らしい食の魅力を内外に発信し、都市ににぎわいをくり出していきます。

多摩川の風物詩「花火大会」
「川崎市制記念多摩川花火大会」も、多くの観客を集める一大イベントです。昭和4(1929)年に始まった歴史のある花火大会で、近年は世田谷区たまがわ花火大会と合同開催しています。市制100周年の令和6(2024)年は、例年約6千発のところ約1万発の花火が楽しめる予定です。



公害問題に取り組んだ経験を生かし、
新たな環境課題にも、川崎市は積極的に対応していく。

工業化の負の側面に、市民、企業、行政が一丸となって取り組む

公害被害が深刻な社会問題に

日本の高度経済成長期を支える国内有数の工業都市となった川崎市。一方で、工場群から排出されるばい煙や汚水による公害が大きな社会問題となりました。

工場からの煙は市内の空を灰色で覆い、光化学スモッグもしばしば発生しました。多摩川も工場排水をはじめ生活排水やごみなどの流入により、水面が泡立つほど水質が悪化しました。

行政や企業を動かした
市民の取り組み

公害の被害を受けた市民は、環境改善のための苦情や嘆願を行うとともに、「公害防止条例」の制定に向けた活動を行うなど、安心して健



昭和42(1967)年 川崎の臨海部

康に暮らせるよう、国や市、企業に働きかけました。

国に先駆けて条例を定めた
行政の取り組み

深刻化する公害問題に対応するため、川崎市は昭和35(1960)年に「公害防止条例」を国の法整備に先駆けて制定しました。

また昭和45(1970)年には、市内の石油消費量の大部分を占める39の工場と「大気汚染防止協定」を結び、公害発生源への対策を強化。昭和47(1972)年には、全国初の大気汚染物質に対する総量規制を盛り込んだ新たな「公害防止条例」を制定しました。さらに公害監視センターや公害研究所を設立するなど、公害問題に取り組むための体制を整えていきました。

公害防止に向けた
企業の取り組み

市民の環境意識の高まりと行政の規制により、企業も公害防止への取り組みを積極的に行いました。排出ガス中の有害物質を除去する集じん装置などの排煙処理装置の導入をはじめ、排水から有害物質を除去する排水処理装置などを導入。汚染物質を排出する前に処理

する技術を開発し、実際の現場に取り入れられました。

さらに良質な燃料への転換など、公害対策に向けたさまざまな技術やノウハウを生み出し、厳しい排出基準に対応していきました。

対策によって生活環境が改善

市民と企業、行政が一体となって公害対策に取り組んだ結果、川崎市の空と水の状態は少しずつ改善され、昭和54(1979)年には、主要な大気汚染物質である二酸化硫黄の濃度が、市内全域において環境基準を達成。安心して暮らせる環境を取り戻しました。

こうした公害問題に取り組んだ経験は、大きな財産を残しました。市内の企業は、有害物質の排出基準に適應するための公害防止技術を開発し、また社内で公害防止関連の資格をもつ技術者を育成するなど、公害対策の技術的・人材的基盤を備えました。これらは川崎市ならではの高度な環境技術として次の時代の環境問題に生かされていく他、市民生活においても環境に優しい生活スタイルを取り入れるなど、環境に対する意識の高まりが広がっていきました。

ピンチをチャンスに変え、ごみ処理の問題を乗り越える

ごみの排出量が増える
非常事態に

川崎市は、生ごみの毎日収集や可燃物の全量焼却を全国に先駆けて行ってきましたが、80年代後半には経済の発展や人口の増加とともにごみの排出量が増え続け、市のごみ焼却場の焼却能力を超え、埋め立て地の限界に迫る状況となりました。そして平成2(1990)年、「ごみ非常事態」を宣言。市民と協力し、ごみの削減に向けた活動に取り組み始めました。

鉄道輸送や地域ぐるみの
取り組みを推進

市はごみの排出量を減らすため、市民にごみ出しの抑制を呼びかけるとともに、資源物の分別収集を徐々に拡大。焼却対象となる普通ごみの減量に努めました。

また平成7(1995)年には、交通渋滞によるごみの輸送効率の低下を改善し、ごみ収集車の排出ガスなどを抑制するため、鉄道を利用したごみの輸送システムを全国で初めて導入しました。

さらに、ごみの減量化と資源化を促進させるため、「リデュース(発生・排出抑制)」「リユース(再利用)」「リサイクル(再生利用)」の3Rを基本



一般廃棄物を鉄道「クリーンかわさき号」で輸送する専用のコンテナ

とした取り組みへと転換。小学生を対象とした出前ごみスクールや、地域から選ばれた廃棄物減量指導員による地域ぐるみのごみ減量の取り組みなどを進め、市民への理解と浸透に努めています。

ごみ排出量が最少の
政令指定都市へ

これらの取り組みでごみの減量と資源化を進めた結果、平成29(2017)年からの3年間、川崎市は全国の政令指定都市の中で1人1日当たりのごみ排出量が最も少ない都市となりました。令和6(2024)年4月からプラスチック資源の一括回収を段階的に始めるなど、将来の世代によりよい環境を残すため、川崎市はこれからも資源循環の取り組みを推進していきます。

新たな環境課題・脱炭素化に向けた川崎の挑戦

川崎市が脱炭素化に挑む意義

近年、気候変動による大規模な自然災害が頻発しており、対策として脱炭素化が強く求められています。京浜工業地帯の一翼を担い、多くの温室効果ガスを排出する川崎市が活力を維持しながら脱炭素化の実現を目指すことは、非常に重要な試みです。

CO2排出量実質ゼロを
目指して

令和2(2020)年、川崎市は脱炭素戦略「かわさきカーボンゼロチャレンジ2050」を策定。「2050年までにCO2排出量実質ゼロ」を目標に掲げ、市民、企業、行政が連携して脱炭素社会の実現に向けたさまざまな取り組みを開始しています。令和5(2023)年10月には再生可能エネルギーの地産地消などを目指す「川崎未来エナジー株式会社」を設立しました。

脱炭素化に向けた
事業者の取り組み

脱炭素化の取り組みとして、川崎港では世界初の「EV(電気推進)タクシー」が就航。実質再生可能エネルギー由来の電気を動力源とすることで温室効果ガスのゼロエミッ



川崎キングスカイフロント東急REIホテル

「川崎方式」と呼ばれた画期的な条例/
川崎市公害防止条例
川崎市は市民生活最優先の原則に立ち、昭和47(1972)年に新たな公害防止条例を制定しました。この条例の特徴は、地区ごとに汚染物質の許容排出量を設定し、これが維持されるように工場からの大気汚染物質の排出量削減を促したことにあります。これは「川崎方式」と呼ばれ、日本の総量規制の草分けとして、国や自治体の公害対策の推進に先駆的な役割を果たしました。この工場に対する排出規制から、当時は「全国で最も厳しい条例」といわれていました。



令和4(2022)年 川崎の臨海部

シオン化を達成し、運航時の騒音や振動も抑えました。

JR南武線などではJR東日本が「水素ハイブリッド電車」の実証試験を実施中。燃料電池とバッテリーのハイブリッドで走行する鉄道車両の実用化に向け、試験走行を重ねています。

さらに平成30(2018)年、殿町地区のキングスカイフロントに世界初の「水素ホテル」が開業。使用済みプラスチック由来の水素を使った純水素型燃料電池により、ホテル内で使用する電気の約15%を賄っています。

公害問題に取り組んできた川崎市だからこそできる、脱炭素化への具体的な取り組みが着々と進んでいます。



地元を愛し、地元可愛され、川崎のスポーツは、未来へと羽ばたく。

多くの名シーンを生んだ、川崎のスポーツシーンの中心地

市民に愛され続けた野球場

戦後間もない頃、みんな楽しんでる人気スポーツのひとつが野球でした。昭和27(1952)年に誕生した「川崎球場」は、戦後復興のシンボルともいわれ、のちに3つのプロ野球球団の本拠地として使用され、多くの観客でにぎわいました。昭和35(1960)年には外野スタンドが増設され、翌年修復された照明塔は当時日本一の明るさを誇っていました。また、プロ野球だけではなく高校野球や都市対抗野球をはじめ、各種スポーツやイベントなどジャンルを超えて活用され、市民や全国の人々から親しまれていました。

老朽化などの理由から平成12(2000)年に野球場としての幕を閉じ、リニューアル後の現在は「富士通スタジアム川崎」としてアメリカンフットボールなどのさまざまなスポーツやイベントに活用されています。



提供/川崎市市民ミュージアム

実は川崎球場が舞台だった/野球史に残る名場面

王貞治選手 700号ホームラン達成

昭和51(1976)年7月23日、大洋対巨人。王選手が放った打球は、川崎球場の右中間スタンドの鉄塔板を直撃しました。プロ野球史上初となる700号本塁打の瞬間でした。

張本勲選手 前人未到の3000安打

昭和55(1980)年5月28日、ロッテ対阪急。張本選手が振り抜いた打球は、川崎球場の照明塔にまで届きました。前人未到の3000安打は特大ホームランで決めました。

優勝を賭けたダブルヘッダー 伝説の「10.19決戦」

球史の名勝負として今も語り継がれる試合が、昭和63(1988)年10月19日に行われたロッテ対近鉄のダブルヘッダーです。1日で2試合を行い、近鉄が連勝すればパ・リーグ優勝が決定。引き分け以下が1試合でもありと西武が優勝。その舞台が川崎球場でした。



「10.19決戦」満員の川崎球場

第1試合は4-3で近鉄の勝利。第2試合は4-4の引き分けに終わり、近鉄は惜しくも優勝を逃しました。

川崎のことを誇らしく感じた、熱狂的な大舞台

地域への愛着と誇りを育む 川崎フロンターレ

平成8(1996)年のクラブ創設以来、川崎フロンターレは「このまちのために何が出来るか?」を考えたきました。地元イベントへの参加、地域と協力して開催するホームゲームイベント、市と連携した社会貢献活動など、多くの活動を重ねて市民の支持を集めていきました。

アメフトW杯川崎大会

「第3回アメリカンフットボールワールドカップ2007川崎大会」が、川崎球場と等々力陸上競技場で開催されました。決勝はアメリカ対日本。延長の末、惜しくも日本はアメリカに敗れ、準優勝となりました。

セイコーゴールデン グランプリ川崎

世界の一流陸上選手を多数招待し、平成24(2012)年に等々力陸上競技場で開催された日本最大級の陸上競技大会。この年はロンドンオリンピック代表選手選考会を兼ね、ハイレベルな競技が展開されました。

英国代表チーム事前キャンプ

川崎市は英国のホストタウンとして、東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた英国代表チームの事前キャンプを等々力陸上競技場にて受け入れました。大会を契機として、障害の有無に関わらず、誰もが暮らしやすいまちづくりを進めていく「かわさきパラムーブメント」の取り組みを進めています。



川崎フロンターレ



川崎 Team GB Preparation Camp

未来に向けて、川崎のスポーツシーンに新しい風を

地元への愛情と誇りを育む、かわさきスポーツパートナー

地域密着活動でまちを元気に 川崎市をホームタウンとして活躍するさまざまなトップチームを、市は「かわさきスポーツパートナー」として認定しています。各チームの活躍は、川崎市を全国にアピールするだけでなく、市民の地元への愛着や誇り、連帯感を育んでいます。また、選手たちは各種イベントを通して地域との交流を積極的に行っています。憧れのスター選手と身近に接することは、市民の各競技への興味を深め、まちにさらなる活気をもたらしています。

バスケット観戦のスタイルが進化

京急川崎駅隣接エリアに最大1万5千人収容のメインアリーナを備えた複合エンターテインメント施設を建設する「川崎新!アリーナシティ・プロジェクト」が始動。プロバスケットボールクラブ「川崎ブレイブサンダース」のホームアリーナとしても使用され、令和7年(2025)年に着工、令和10年(2028)年10月に開業予定です。



Le FRONT 杯ダンスコンテストの様子

聖地がさらにパワーアップ

JR武蔵溝ノ口駅前が、若者がダンスの練習をしたり、技を競い合ったりする「ブレイキンの聖地」として知られるなど、川崎ではさまざまなストリートカルチャーが育まれてきました。こうした背景から、いろいろなアーバンスポーツなどを楽しめるストリートカルチャーの祭典「ISF KAWASAKI」が毎年秋に開催されており、90年代に開催されていた伝説のダンスコンテスト「Le FRONT杯」が令和4(2022)年に復活。川崎のストリートシーンをさらに熱く盛り上げていきます。



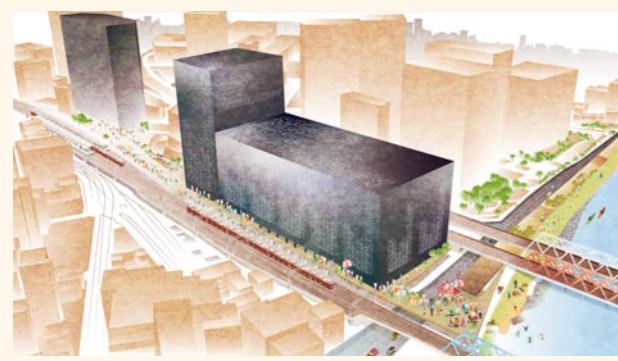
DOUBLE DUTCH CONTEST WORLD 2019

サンタから算数ドリルまで/川崎フロンターレの活動

クラブのミッションを「スポーツの力で、人を、この街を、もっと笑顔に」している川崎フロンターレ。これを実現するため、選手が小児科病棟を慰問する「ブルーサンタ」活動や、公立小学校と特別支援学校で使用される「算数ドリル」の作成、そして選手が学校で児童とともに算数の問題を実演する「実践学習」、さらに「多摩川エコラシコ」と名付けた多摩川の清掃活動など、地域に笑顔が生まれる活動に力を注いでいます。



「多摩川エコラシコ」活動の様子 ©KAWASAKI FRONTALE



アーリーナシティ 令和5(2023)年3月時点のイメージ図 ©DeNA / Keikyū Corporation

文化・芸術



市民一人一人の活動が、川崎の「文化」を育てていく。

市民が育んだ、音楽を楽しむための豊かな環境

2つの音大と4つの市民オーケストラ

川崎には多くの音楽に関わるさまざまな団体や市民が音楽活動を楽しんでいます。市内には、洗足学園音楽大学(昭和42年大学設置)と昭和音楽大学(昭和59年大学設置)の2校の音楽大学があり、川崎市民交響楽団(昭和27年設立)、麻生フィルハーモニー管弦楽団(昭和58年設立)、宮前フィルハーモニー交響楽団(平成3年設立)、高津市民オーケストラ(平成4年設立)の4つの市民オーケストラが、川崎市アマチュアオーケストラ連盟に加盟して活動を続けています。

音楽のまちづくりの推進

市民合唱団もまた、100以上の団体が合唱連盟に加盟し、市内で活動しています。年末恒例の「かわさき市民第九コンサート」では、一般公募による市民合唱団と市民オーケストラが共演。音楽を愛する市民たちが一堂に会し、美しい調べと歌声を響かせて音楽の喜びを分かち合います。市民主体による音楽活動が、市全体で活発に繰り広げられていること。ここに「音楽のまち・かわさき」の基盤があります。

川崎の文化的シンボルの誕生

そんな市民音楽家たちの晴れの舞台であり、川崎市のフランチャイズオーケストラである東京交響楽団の本拠地が「ミューザ川崎シンフォニーホール」です。

このホールは、川崎市が進める「音楽のまち・かわさき」の中核施設として、市制80周年にあたる平成16(2004)年7月1日に誕生しました。中央のステージを取り囲むように約2千の客席をらせん状に配したピンヤード(段々畑形式)を採用。その音響は国内外で評価が高く、世界的指揮者のサー・サイモン・ラトル氏は「世界最高のホールのひとつ」と絶賛しています。



ミューザ川崎シンフォニーホール

映画街から発展した、撮る・創る・観るの映像のまち

4つのシネコンがあるまち

川崎は、日本初の大型シネコン「チネチッタ」をはじめ4つのシネコンや、公共施設としては珍しくミニシアターをもつ「アートセンター」があるなど、映画を身近に親しめる施設が豊富です。また、映画やドラマなどの口ケ地として市内の施設などが使われることも多く、「観る」「撮る」環境に恵まれたまちです。

日本映画大学の映画・映像業界での活躍

新百合ヶ丘にある日本映画大学は、映画や映像文化を担う人材を育成する日本で唯一の映画単科大学です。前身校を含め半世紀近い歴史の中で、現在まで多くの卒業生を輩出し、映画・映像業界で活躍中です。また地域社会と連携し、芸術分野を中心とした映像文化の振興を推進しています。

市民主導による映画祭の開催

平成7(1995)年にスタートした「KAWASAKI しんゆり映画祭」は、市民スタッフが企画、運営までを担う、市民がつくる映画祭です。回を重ねるごとに市民の認知度も深まり、広がりを見せるなど、地域ぐるみで盛り上げる映画祭と



KAWASAKI しんゆり映画祭

なっています。

映像文化のさらなる発展へ

このような映像に関わる企業や団体の交流や提携をさらに深めるため、川崎市は「映像のまち・かわさき」推進フォーラムを設立し、子どもを対象にした映像制作などの事業の推進に取り組んでいます。また、川崎市の立地の優位性を生かした口ケ地の推進事業や、川崎市に残る映像記録を「川崎市映像アーカイブ」として保存・活用する事業などにも取り組み、映像文化の振興や映像産業の発展を通じた川崎市ならではの魅力づくりを進めています。

企業・音楽大学・メディア・行政などの参加で「音楽のまち・かわさき」推進協議会が発足し、「音楽のまちづくり」がスタートしました。

音楽を愛する人々の裾野をさらに広げる

ミューザ川崎シンフォニーホールは、海外の一流オーケストラや東京交響楽団の演奏会をはじめ、子どもたちが楽しみながら音楽に触れる機会となるプログラムや市民に音楽活動の場を提供・支援する活動なども展開しています。

音楽を愛する人々の裾野をさらに広げ、市民が愛着と誇りを感じられるホールを目指しながら、「音楽のまち・かわさき」の魅力を国内外に発信し続けています。

音楽に川崎の多様性を

市民主体の音楽イベントにはさまざまなものがあります。「かわさきジャズ」は、川崎らしさを追求する音楽フェスとして、平成27(2015)年から始まりました。ホールでの演奏をメインとしつつ、市民によるフリーライブなども市内各地で同時に開催し、大いに盛り上がります。「アジア交流音楽祭」は、アジアの

誰もが文化・芸術に気軽に触れ、親しめるまち

多彩な芸術分野が一堂に会す

「川崎・しんゆり芸術祭(アルテリッカしんゆり)」は、平成21(2009)年に始まったオペラ、オーケストラ、バレエ、演劇・落語、美術展、映画など、あらゆるジャンルが一堂に会し、市北部を中心に開催される総合芸術祭です。イベントの広報、各公演の受け付け、客席誘導などは市民ボランティアが中心となっており、大人から子どもまで楽しめる地域主体の芸術イベントとして親しまれています。

アートを楽しむ心を育てる

平成11(1999)年に開館した「川崎市岡本太郎美術館」は、展覧会



鑑賞プログラムの様子

市民の手によって受け継がれる3つの獅子舞

市内には市民によって大切に受け継がれている数多くの民俗芸能があります。例えば、3頭の獅子が一緒に舞う形式の獅子舞が市内3カ所に伝えられています。多摩区の「菅の獅子舞」、宮前区の「初山の獅子舞」、幸区の「小向の獅子舞」の3つは、いずれも県指定の無形民俗文化財です。これらの獅子舞は、いずれも雄の獅子2頭が雌の獅子をめぐって争う「雌獅子隠し」と呼ばれるストーリーが特徴で、五穀豊穡や疫病退散を願って舞われます。

多様な文化が共生している川崎ならではの音楽イベントです。アジア各国のアーティストにより、民族音楽や舞踊、現代ポップスまで、幅広いジャンルのステージを展開します。また、宮前区で開催される「しあわせを呼ぶコンサート」をはじめ、障害の有無に関わらず誰もが参加でき、楽しめる音楽イベントがあります。音楽を通じて川崎市の特徴である多様性を表現し、さまざまな価値観との融合を図る。これも「音楽のまち・かわさき」ならではの活動です。

日本のライブシーンを変えた「聖地」/「CLUB CITTA'(クラブチッタ)」の誕生

川崎市の音楽を語るうえで欠かせないのが、昭和63(1988)年にオープンした「CLUB CITTA'(クラブチッタ)」です。オールスタンディングで1,000人以上を収容できる、コンサートホールとライブハウスの中間のような「ライブホール」のパイオニア的存在。アーティストと観客との距離感がこれまでにないほど近い空間は、濃密かつ熱狂的な一体感を生み、日本のライブシーンを大きく変えました。国内はもちろん海外アーティストも積極的に招致し、レッド・ホット・チリ・ペッパーズ(1990年)、ニルヴァーナ(1992年)、ジャミロクワイ(1993年)といった世界的ビッグネームの初来日公演が、クラブチッタで行われました。当時の日本のミュージックシーンの最前線が、川崎に集結していたのです。

川崎ミライ予想図 20XX

誕生から100年を迎えた川崎市。

この先のミライはどうなっていくの？

そんな疑問に、市長が答えます。

始動しているプロジェクトから見えてくる、

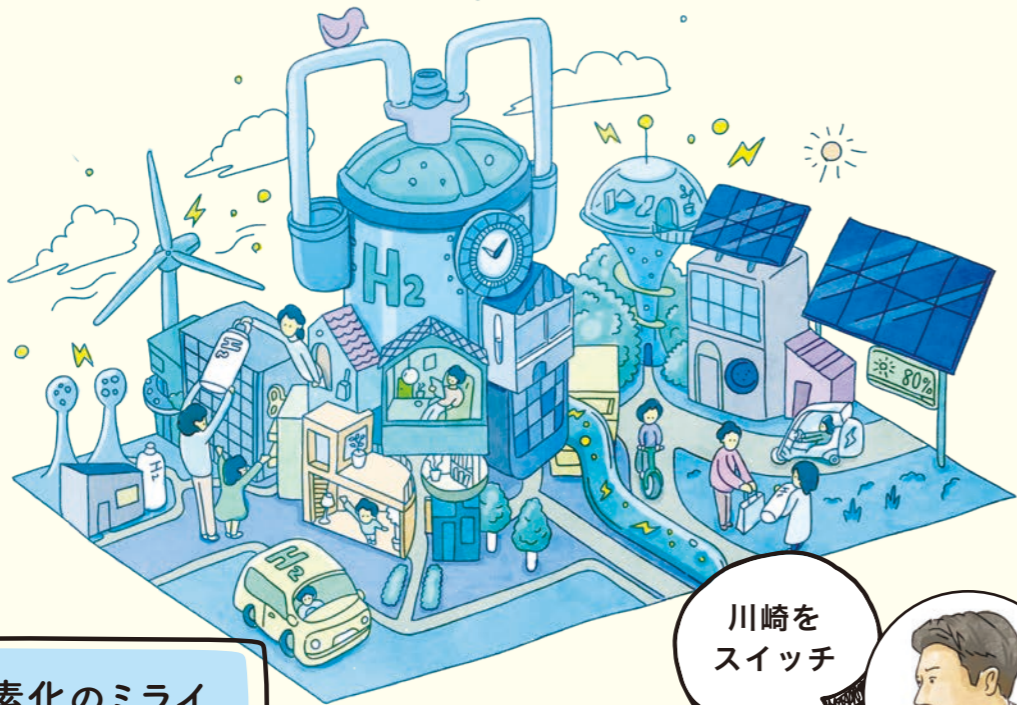
元気で、豊かで、夢のあるミライ。

進化する川崎を思い浮かべながら、

想像の翼を広げてみよう。

福田市長
が語る





脱炭素化のミライ

地球温暖化の原因といわれている二酸化炭素 (CO₂) をはじめとする温室効果ガスの排出量を実質ゼロにしようという世界的な脱炭素化の取り組み。これは川崎市にとっても、とても重要なことです。

川崎市は工業地帯を中心に、政令指定都市の中では最も温室効果ガスを排出しながら発展してきました。脱炭素化は、それを真逆にスイッチするという話です。川崎市は、日本で初めて^(※1)企業や市民と一体となって脱炭素化を実現するための取り組みを定め、「2050年のCO₂排出量実質ゼロ」を表明しました。それはなぜでしょうか？

川崎市には、かつて公害問題に取り組んだ経験があるからです。工場の煙で灰色だった空を青空に変え、死の川と呼ばれた多摩川をアユが戻ってくるほどによみがえらせた。これほど環境意識が高い川崎市民なら、脱炭素化はきっと達成できるはず。

公害を克服した時のように、ルールをつくり、行動を変え、技術によって解決する。これまで大量の温室効果ガスを排出してきた川崎市にできれば、世界のどの都市でも実現できるはず。川崎市が脱炭素化に取り組むことは、世界に対する使命なのです。

川崎カーボンニュートラルコンビナート構想

日本の脱炭素化をリードするモデル地域を目指して策定された、川崎市の戦略構想。CO₂フリー水素などの供給体制の構築を目指す「川崎水素戦略」をはじめ、「炭素循環戦略」「エネルギー地域最適化戦略」を大きな柱に、カーボンニュートラルに対応した新たなコンビナートを形成する取り組みを推進しています。

※1: 事業者・団体の賛同を得ながら脱炭素化に向けた戦略を策定したのは、地方公共団体の取り組みとしては日本初。

※2: 一定の面積を超える大規模建築物の建築主や、中小建築物をつくる大手ハウスメーカーに、建物を新築する場合などには太陽光発電設備を義務付けるという条例。

川崎をスイッチ

脱炭素化が実現したら、私たちの暮らしはどう変わるのでしょうか？

川崎市では、新しい住宅も対象にして太陽光発電の設置を義務付けるという条例^(※2)を政令市で初めて決めました。将来的には、遠くの発電所から手間とコストをかけて電力を運んでくるのではなく、自分たちが使う電力は自分たちのエリア内でまかなう。そんなエネルギーの地産地消というスタイルに変わってくると思います。

また、クリーンなエネルギーである水素を積極的に活用するという計画も推進しています。まずは臨海部のコンビナートを中心に、パイプラインにより化石燃料に変わるエネルギーとして水素がさまざまな形で利用されるようになるでしょう。その後、水素エネルギーは商業施設や一般家庭でも使われるようになっていくかもしれません。

将来的には、カセットコンロ用のガスボンベみたいに「家庭用水素エネルギー」が販売され、エネルギーが足りなくなったら、お隣に「ちょっと貸して」と借りに行き、お隣さんは「はい、どうぞ」と渡すみたいな、そんな未来もあり得るのではないかと考えています。



川崎の南端は世界の最先端

殿町地区の「キングスカイフロント」は、国際的な研究開発拠点として、とても先進的な活動を行っています。例えば、創薬。がん、アルツハイマーといった難しい病気の治療薬や、新型コロナのような感染症のワクチン、さらには1mmの1万分の1以下という超極小サイズの「スマートナノマシン[®]」で体内の狙った場所に薬を届ける技術など、先進医療のトップをゆく研究が日夜行われています。まだ世の中になくものをつくり出す場所。それが川崎臨海部です。薬や医療機器、素材、エネルギー。今はないけれど、将来、確実に必要とされるものを生み出していく。だから私はよく言うんです。「川崎の南端は、世界の最先端」だと。

臨海部は、海外からの研究者も交えた世界の英知が結集する場所です。周辺には、道路も、港湾も、国際空港もあります。さまざまな人、モノ、発想、技術が目まぐるしく往来し、世界に向けて新しい価値を発信する。これまでもそうだったように、川崎臨海部は日本の未来を切り開くエリアであり続けると思います。

殿町国際戦略拠点「キングスカイフロント」

川崎臨海部の殿町地区に位置する、世界最高水準の研究開発から新産業を創出するオープンイノベーション拠点。約40haのエリアに約70機関が集積し、健康・医療・福祉・環境などの課題解決に取り組むとともに、これらの分野でのグローバルビジネスを生み出すことで、日本の成長戦略の一翼を担うことを目指しています。



川崎臨海部のミライ

だから近い将来、川崎臨海部は、子どもたちが最も憧れる場所になっているんじゃないでしょうか。

さまざまな国から科学者や研究者が集まり、誰も見たことないモノやコトを生み出していくSF映画が現実になったようなまち。世界中の若者がここに来れば夢がかなうと、「KAWASAKI」で働くことを目標にするようになったら本当にうれしいですね。

すでに川崎市では、最先端の研究を夢見る若者たちを応援する取り組みを始めています。「新川崎・創造のもり」にアジア初のゲート型商用量子コンピューターが設置されたのを機に、市内の高校生に向けて、次世代の量子ネイティブ人材を育成するためのプログラムを開催しました。量子コンピューターはキングスカイフロントでの創業の開発をはじめ、さまざまな分野の活動と連携しているので、将来的には川崎出身の研究者が世界をあっという間に驚かせる新技術を生み出すこともあるかもしれません。

これから先、川崎臨海部が見せてくれるであろう未来を想像すると、本当にワクワクしますね。



スポーツ 循環社会

政令市の中で最も市域が小さい川崎市は、スポーツを行う環境としては決して恵まれているわけではありません。でも、実はスポーツに対する意識はかなり高いんですよ。

そして、川崎市に拠点を置くプロスポーツチームはすごく強い。しかもプレーだけでなく、スポーツで地域に貢献しよう、まちを盛り上げようという思いが非常に強い。まちを愛し、愛されるといった相思相愛の関係が、チームにも、まちづくりにも、好影響を与え続けている。これは川崎市の大きな強みです。

また、プレイキンなどでは若者たちの活躍が目覚ましい。若者の挑戦する気持ちを市が応援し続けてきたことが、まさに花開いたのだと思います。「何かに挑戦したいのなら、川崎においで」と、あらゆる若者に伝えたいですね。

スポーツは、して楽しい、見て楽しい、支えて楽しい。「スポーツ=喜び」です。スポーツを通してみんなが元気になる「スポーツ循環社会」というものを、これからも体現していきたいですね。



スポーツの まちの ミライ

川崎市スポーツ推進計画

誰もがスポーツに参加し、スポーツの楽しさを味わうことができる「スポーツのまち・かわさき」の実現に向けた推進計画。スポーツ活動の推進はもちろん、健康長寿社会や共生社会の実現、人や地域の交流促進などを目指し、スポーツを「する」、「みる」、「ささえる」機会を充実させることで、スポーツを楽しむ人の拡大を図る取り組みを推進しています。

緑のミライ



全国都市緑化かわさきフェア

毎年、全国各地で開催されている「花と緑の祭典」。令和6年度は、市制100周年の節目を迎える川崎市で開催されます。市内の三大公園である富士見公園、等々力緑地、生田緑地を中心に市内全域を会場として、市民、地域の団体、企業などの皆さんとともに、川崎らしい都市の中の「みどり」の価値を全国に発信していきます。

緑の中に 住む



昔、川崎市は緑豊かな土地でした。しかし都市化が進むにつれ、緑は減ってしまったのです。これを復活させようと、市制100周年に向けて「市民100万本植樹運動」を始めましたが、目標はすでに達成し、今は150万本を目指して取り組んでいます。

また、企業の皆さんと一緒に、コモンズ（共有地）という観点から、企業でも自治体のものでもない共有財産としての緑の空間をつくる活動にも取り組んでいます。自分のためだけの緑ではなく、みんなで楽しめる緑。そういう緑を次々につくり出し、育み、その中で暮らそうという試みです。

量だけでなく質も重要。海外などでよく見られる、街中に緑があふれ、窓辺には花が咲き誇っている。自分のためだけでなく、みんなで豊かな景観をつくり、守っている。「緑化フェア」をきっかけに、利他の心をもった市民の活動が市内に広がっていけばと思っています。

地域に広がる 「まちのひろば」

誰もが気軽に集え、多様なつながりを育む地域の居場所「まちのひろば」が、身近な地域にあふれるまちを目指しています。

誰かを支えたり支えられたり、自分らしくいられる温かい居場所を、市民の皆さんと一緒に広げていきます。



心でつながる コミュニティ



今までの社会は、年齢や性別など、さまざまな区分けをして成り立っていましたが、社会が複雑で多様化している今、人はお互いに支え合わなければいけないことに、みんな気づき始めている。だからつながりを求めるように回帰しているんですね。市はいろいろな形で、多様なつながりの場を生み出す試みを始めています。

川崎市って3世代同居が2%しかないんですよ。核家族化はそこまで進んでいる。だから例えば、寺子屋のような地域

コミュニティの ミライ

のおじいちゃんやおばあちゃんと子どもたちが触れ合える場をつくる。そうすれば、血のつながりはなくても心でつながる分厚い関係性がいくつも重なっていくはずですよ。

年齢も性別もバラバラで多様だけれど、一人一人に居場所がある。そういう顔の見える小さなコミュニティが集まって、川崎市という大きなまちになっている。そんな、つながり合う温かな未来を目指しているのです。

WE LOVE KAWASAKI

さまざまな分野で活躍する川崎ゆかりの人々に、まちの魅力や好きなのところをインタビュー。これまでの思い出やまちの変化を振り返りながら、川崎への思いを語っていただきました。

現在、川崎でお米作りや川崎産のワイン作りをしています。学生と稲刈りを体験し、その楽しさを共有できました。自分の子どもと一緒に参加することで食育にもつながり、米一粒も残さず食べるようになったのは大変うれし出来事でした。



若者文化の発信基地を目指すライブハウス「SUPERNOVA KAWASAKI」

23歳まで川崎に住んでいて、高校からダンスを中心に生活してきました。40歳でパフォーマーを引退する時期に、海外の方に日本の文化や生まれ育った場所についてうまく答えられない自分がいて、それをきっかけに「川崎利夫」の名前で川崎の魅力を動画で発信するYouTubeを始めました。そうした中、ダンスやブレイキン、今回撮影したミューラルアート（※）など、ストリートカルチャーが川崎のまちに定着してきたことを肌で感じています。昔は認知度が低く、肩身の狭い思いでダンスを練習していましたから。この先は、自分に人との出会いや貴重な体験を与えてくれたダンスを通じて、川崎のまちに貢献していきたいと考えています。

※施設所有者の許可を得てアーティストが描く壁画アート

若者文化を後押しするこのまちの力になりたい

若者文化ともつながりの強いストリートカルチャーをここまで受け入れてくれる、応援してくれるまちはそう多くないかもしれません。若者文化を育み、みんなで活気づけていこうとするポジティブな雰囲気があり、これからの川崎市の発展が楽しみです。こうした環境を生かして、若い世代の方には好きなことを見つけて、楽しんで、多くの仲間を作って、そして大きなことを実現してほしいと思います。僕は無我夢中でダンスばかりしていましたが、「好き」を追求していくと、周りに熱量が伝わって、「コミュニティ」の輪が広がっていくんです。コミュニティの仲間は夢や目標をかなえるための力になってくれるし、自分が弱った時には助けてくれる、どのような世界でも大切な存在だと思います。

川崎の地元愛が、好き。

この自分も思っているところも、そこには川崎があるところが、好き。



新曲「最高速度」の撮影が行われた等々力球場グラウンド

宮崎朝子さん (Gt.Vo)、松岡彩さん (Ba)、吉川美冴貴さん (Dr)

=写真中央 =写真左 =写真右

川崎市立川崎総合科学高等学校の軽音楽部で結成された3ピースロックバンド。高校卒業と同時に本格的にバンド活動を開始し、2017年12月には「NHK紅白歌合戦」に初出場。2023年にCDデビュー10周年を迎えた。2017年から川崎市市民文化大使、2022年からはかわさきスペシャルサポーターを務める。

どんなときでも私たちのかえる場所

宮崎：川崎市は生まれ育った私自身にとってもSHISHAMOにとっても、たくさん思い出があるまちです。初めてライブハウスでライブをしたのも、部活帰りに楽器屋さん立ち寄りしていたことも、デビューした年、5周年10周年というタイミングで、ラッタデッラ中央噴水広場でフリーライブをさせてもらったことも大切な思い出です。私たちが大好きな川崎フロンターレの試合を見に行くことがサポーターの方と同じチームを応援する地元の仲間として受け入れてくださったりして、自分らしさを見失わずにいられる。居心地のいいまちです。

吉川：好きで続けているバンドですが、時には壁にぶつかって心が折れそうになることも。そんな時に川崎を歩くと、初めて高校で音を鳴らした時の感情などが楽しかった記憶として鮮明に思い出されます。そうすると初心に戻れて「また頑張ろう！」と思える。

自分が夢中になれることを迷わず続けてほしい！

川崎の工場夜景が、好き。



KAWASAKIの響が、好き。

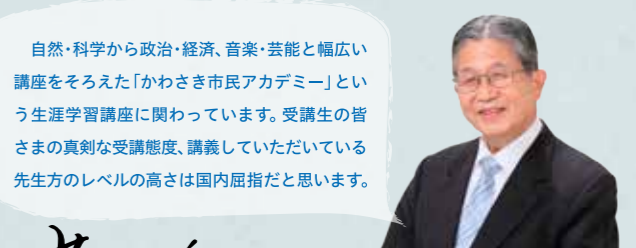
川崎という名前が好きです。古き良き時代と近未来を感じます。

松本利夫さん

2001年EXILEのメンバーとしてデビュー。2007年より役者としての活動を開始すると、2015年末にパフォーマーを卒業し、現在は「松本利夫ワンマンSHOW『MATSU』ぼっち」シリーズの上演、舞台や映画、ドラマで主演するなど、役者業を中心に活躍中。2021年からは川崎市市民文化大使を務める。

アーティストと市民が一体となって制作したSUPERNOVA KAWASAKI近くのミューラルアート

川崎の多摩川が、好き。



藤嶋 昭 さん
 「光触媒」を発見した化学者。東京大学特別栄誉教授を経て、東京理科大学栄誉教授。紫綬褒章、文化勲章受章。認定NPO 法人かわさき市民アカデミー顧問理事。川崎市名誉市民。

豊かな自然と文化で 心豊かな自然と文化で

私が化学者だからかもしれませんが、資源がない日本の発展には科学技術が欠かせないと考えています。私は週末の朝夕によく多摩川を散歩していますが、理科への入り口という視点でも多摩川はとても面白いですよ。雲はどうして白いの？花に模様のような点々があるのはどうして？など、自然の中での気づきや疑問は知識を深めるきっかけとして大切です。歩きやすいように整備もされていて、植物の変化で四季を感じられることがぜひいたくだと思います。



川崎駅北口にある「川崎浮世絵ギャラリー」〜齋藤文夫コレクション〜にも定期的に足を運びます。日々の暮らしやすさに加えて、生活圏内に文化的な場所があるというのもいいですね。若い世代のファミリー層も増えていて、子どもたちが遊べるという点も聞くと嬉しい。高津区にある「光触媒ミュージアム」の館長をしているのですが、家族ぐるみの交流があった絵本作家・かこさとしさんの作品を含め、子どもたちに勧めたい本を600冊ほど置いています。子どもたちに気軽に遊びに来てもらえたらと思います。入り口にあめ玉なんかも用意していたのですが、ゆつたりののびと絵本に親しんでくれている様はいいものですね。自然豊かな川崎市で、心豊かな時間を感じながら成長してほしいです。

川崎の多様性 感じるところが、好き。

いろんな人が集まる 多様性あふれるまち
 川崎はさまざまな面があるの面白いところ。たとえば、社員選手時代の飲み会でよく行った川崎駅東口あたりは、大衆居酒屋など多いにぎやかな雰囲気ですが、西口に行くとならび川崎プラザなどのショッピングモールがあったりと、まったく違う雰囲気。最先端のまちというイメージもありますが、夏場の練習でよく走った多摩川沿いには自然もたくさんあります。多様性にあふれているからこそ、いろんな人たちが一緒にいられる。そこが川崎のよさではないでしょうか。
 また、川崎にはスポーツが盛んという一面もあります。サッカーや



人口がどんどん増え、進化し続けている一方で、当たり前のようにベビーカーを助けてくれる人がいるなど、人の温かさを感じられる川崎のまち。次の100年もこのまま成長し、いつまでも勢いのある、安心して暮らせるまちであってほしいですね。

藤山 竜青 さん

プロバスケットボールクラブ・川崎ブレイブサンダース主将。2019年バスケットボールのワールドカップ日本代表。

バレーボール、アメフトなどのスポーツチームがたくさんあり、川崎ブレイブサンダースもその一員として、川崎からバスケットの未来をつくっていくこと、「かわさきスポーツパートナー」としての活動に力を入れています。地域の学校を訪ね、バスケットボールと一緒にやっているのですが、年々クラブの認知度もアップしてきて、試合を見たこと子どもたちとのふれあいは、自分にとってエネルギーをもらえる時間。こうした活動や試合での活躍を通して、僕たち自身ももっと愛される存在に成長し、川崎をポジティブなイメージでいっぱい、「スポーツのまち」としてさらに盛り上げていきたいですね。

川崎の音楽と福祉が、



小川 典子 さん

ピアニスト。英国と日本を拠点に世界のオーケストラ・指揮者との共演や室内楽、リサイタルなど、幅広く演奏を行っている。

「手もたずさあっているところ」が、好き。

音楽と福祉が手を携えあう 人生をデザインできる土地

人々がとても気さくなのが、川崎の一番の特徴だと思います。そんなまちの雰囲気は、「ミュージザ川崎シンフォニーホール」の隅々にまで広がっており、20年間続いている市民交流室での「ジェイミーのコンサート」をはじめ、公演や演奏会に来てくださる皆さんは、温かく聴いてくださいます。お気に入りのスポットは、ミュージザから少し足を延ばしたところで見られる、幻想的な工場夜景。さらに、反対方向にずーっと行くと、日本民家園や林の中の歩道があります。この、「ギンギン工業地帯」と「原生林の緑」、両極端な風景がとてもオススメなんです！川崎は福祉が充実しているまちでもありますよね。遠方を訪れた際には、川崎の福祉の充実度を褒めていただくことがよくあります。加えて、この福祉と音楽がしっかりと手を携えあっているのも川崎ならではの、音楽大学も特別支援学校も充実していて、どんな環境や状況でも、必ず温かい手を差し伸べてくれます。この住みやすさと市民の気さくな温かさをもって、皆さんが自分の人生をデザインしながら前を向いて進んでいけるように願っています。

心のバリアフリーで変化し続けるまち

中学生の頃に車いすを使うようになったのですが、生まれ育った地元の読売ランド前駅は当時、スロープもエレベーターもなく、ホームへ降りるために駅員さんに車いすごと担いでいただきました。今では整備され、だいぶ移動が楽になったと感じます。縁あって23歳で水泳を始め、努力の末にパラリンピックでメダルを取りました。母校の生田小学校を含め、講演会などでお話しさせていただく機会があるのですが、私が中学生の頃と比較して、現在では全ての人がその人らしく生きることが素晴らしいという考えが一般化しつつあるように感じます。その流れがうれしいですね。心のバリアフリーと私は言っていますが、障害の有無に関係なく、目の前の人にとって今この状況はどうだろうと想像し思いやるのが大切だと思います。

成田 真由美 さん

競泳選手として通算6回パラリンピックに出場し、15個の金メダルを獲得。「水の女王」と呼ばれる。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では、大会組織委員会での理事として、バリアフリー環境の整備にも尽力。2005年から川崎市市民文化大使を務める。



めざせ！やさしさ日本代表！ かわさきパラマウント

※市は、「誰もが自分らしく暮らし、自己実現を図れるまち」としてかわさきパラマウントを推進しています。

川崎の流れが、好き。

福田市長とともに、かわさきパラマウント推進フォーラムの共同実行委員長をいたしました。ロゴマークの「パ」を見て何だろう、と調べてパラマウントへの理解を深め、さまざまな場面で考えを膨らませてほしいです。



川崎の人々の想いが、好き。

安堵感を得られるふるさと川崎 地元の人々の応援が土俵に上がる励みに
 僕は川崎区出身で、小さい頃は川崎大師や稲毛神社で遊んだり、高校時代は多摩川の河川敷でマラソンをしたりと、川崎のいろいろなところ思い出があります。場所中は全国を飛び回っていますが、地元に戻ってくるとすごく安堵感を得られる川崎は、自分にとってはまさに故郷です。2019年に大きなけがをした時、手術後は川崎でリハビリ治療を受けたんです。その時、地元の後援会の方々も含めて、多くの方々にたくさん声をかけていただいたことが精神的にも、すごく励みになりましたね。それが復帰につながったとも思いますし、今もつらい局面になると、声をかけていただいた一人一人の顔が思い浮かびます。「川崎の人たちに支えてもらう土俵に上がっているんだ」と感じています。場所前、必勝祈願をするために訪れるのは「若宮八幡宮」と「川崎大師平間寺」。川崎出身の関取として、応援してくれる方々が元気になるような相撲を見せていきたいと、グツと気合を入れることができる場所です。若い世代にも土俵で闘う自分の姿を見てもらい、何かに熱中してやり遂げることを楽しさを感じてもらえたらうれしいですね。

友風 関

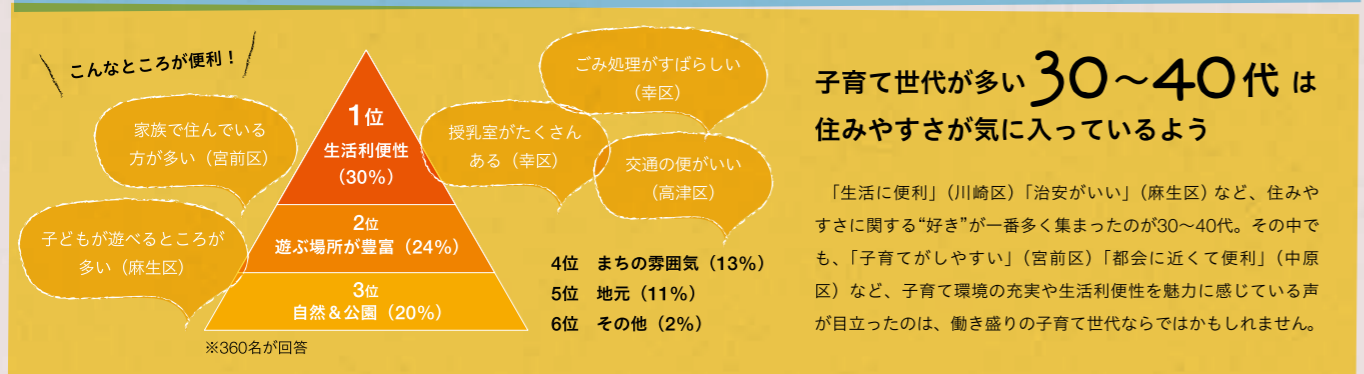
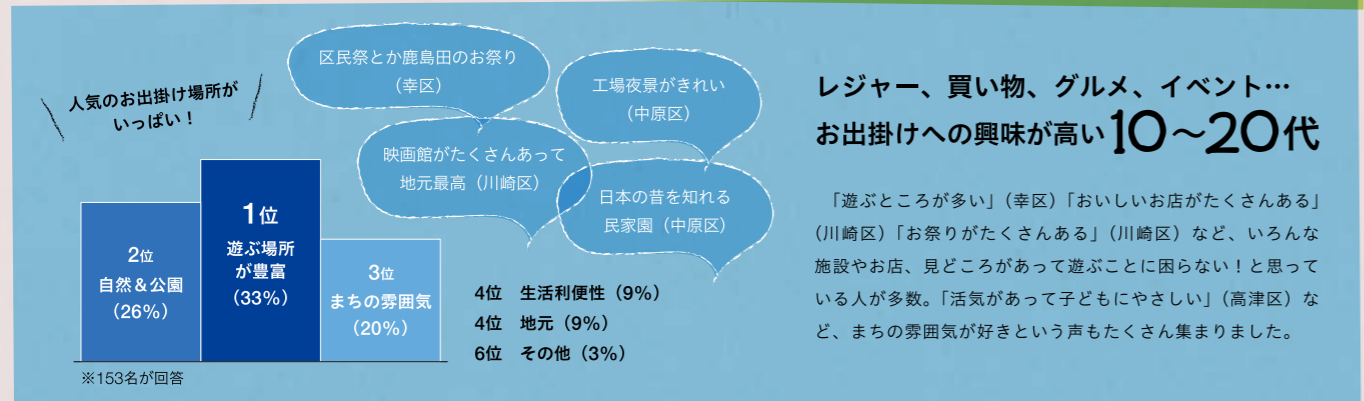
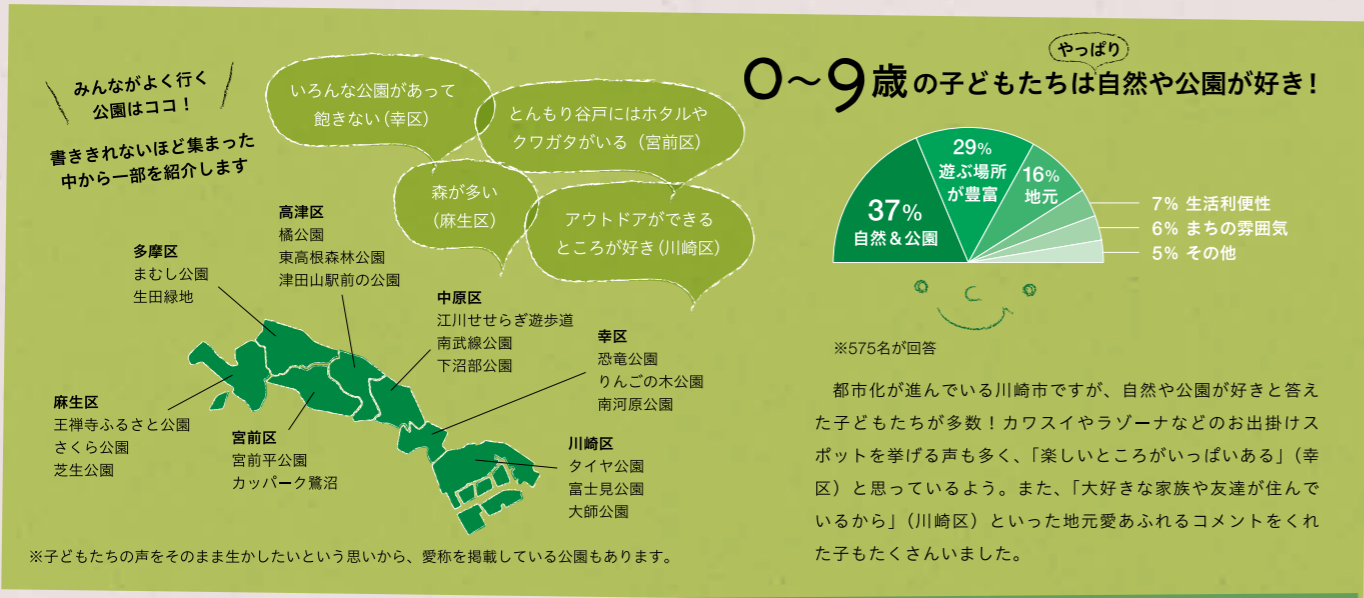
二所ノ関部屋所属の大相撲力士。得意技は突きと押し。華麗に鍵盤を弾く「ピアノ力士」としても有名。



©公益財団法人 日本相撲協会

川崎の好きなところは？

市制100周年のプレイベントや区民祭で市民の皆さんにアンケートを実施したところ、
場所・モノ・雰囲気など1,272人のさまざまな“好き”の声が集まりました！



※アンケート調査実施概要/期間：令和5(2023)年10月~11月 回答数：1,272名 方法：イベント会場でのアンケート

川崎の夜の工業地帯が、好き。



張本美和さん

卓球選手。高校1年生。Tリーグチーム「木下アビエル神奈川」所属。2024年全国卓球選手権大会準優勝。パリ2024オリンピック日本代表に内定している。



和気あいあいとにぎやかなまち
食事や買い物も息抜きに

川崎市は人が和気あいあいとしていて、にぎやかなまちです。特にプロサッカークラブ「川崎フロンターレ」が優勝したときは、まち全体が盛り上がり、歩いてうれしかったです。

私自身、地元の方を含め、ファンの方にも応援をいただいています。その応援が自分を律する力になり、時に勇気づけられています。最近では、試合会場に私の名前が入ったタオルを持ってきて、応援してくださる方も増えました。

今は「オリンピックで金メダルを取る」ことが目標。何かに対して一生懸命取り組んでいる姿はカッコいいと思うので、私も練習をがんばっています。川崎市に住んでいる中・高生の皆さん、一緒に川崎を盛り上げましょう！

シユできるんです。

今「オリンピックで金メダルを取る」ことが目標。何かに対して一生懸命取り組んでいる姿はカッコいいと思うので、私も練習をがんばっています。川崎市に住んでいる中・高生の皆さん、一緒に川崎を盛り上げましょう！

川崎の人のつながりが、好き。



田中信司さん

つかさサンプル代表取締役。食品サンプルの製造・販売。近年は国内外で活動。2022年かわさきマイスター認定。



地域の人のつながり
触れ合っていきたい

「ものづくりのまち川崎」を伝えるために、十数年前から小・中学校でもものづくりの楽しさや大切さを伝える授業を行っています。先日、自動車販売店で店員さんに車の荷台に食品サンプルを積む話をしたら、以前授業を受けてくれた生徒さんで、「知っています」と私のことを覚えてくれていたんです。職種は違えど、ものづくりに関わる職業に就いていることを知り、うれしくて鳥肌が立ちました。

授業では父の言葉を借りて「山登りに頂上があったても、ものづくりに頂上はなし」と話していますが、よりよいものを作るためには日々勉強、日々努力。授業以外でも、日頃から上達するために考えて行動することで結果が変わる、突き詰めていくことの大切さを伝えていきます。

北部市場が近いので、サンプルをおいしく見せるにはどうするのがよいか、実物を観察し、市場の方に直接話を聞くことを大切にしています。それができる今の環境が気に入っています。かわさきマイスター※になってからさまざまな職種の方との交流が広がり、地域のイベントでも気軽に話せたり。僕の中では人とのつながりが深いのも川崎の好きなところなんです。

※市では、極めて優れた技術・技能を有するものづくりの達人を「かわさきマイスター」として認定しています。

私は2004年に来日した後、2017年の結婚を機に妻の実家がある川崎に移住しました。子どもと一緒に出掛けると、積極的に話しかけてくださる方が多く、温かいまちななと感じています。また、都会のイメージがありますが緑が多く、保育や教育施設が充実しています。子育てしやすい環境も魅力です。2020年からは、市在住の外国籍の市民が地域課題について話し合い、市に提言していく「川崎市外国人市民代表者会議」の委員長を2期務めました。議論を重ねる中で、川崎市が外国人も同じ市に住んでいる一市民という考えを持っていることにすごく感動しました。川崎市は、日本人、外国人問わず、多様性を尊重し、自分が挑戦したいことをかなえていける度量のあるまち。川崎の子どもたちには、自分のやりたいことにどんどん挑戦してほしいですね。

ペレーラヒルサンケータさん

スリランカ出身。2017年から川崎市に在住。都内のIT企業に勤めるかたわら、2020年から「川崎市外国人市民代表者会議」委員長を2期にわたって務めた。



川崎がすべて好き。

7つの区で形成される川崎市には、それぞれの地域のカラーがあるのが魅力です。例えば川崎駅がある川崎区はめちゃくちゃ都会ですし、中原区はおしゃれな雰囲気があります。外国人も住んでいるのでいろんな食文化もあり、どこを訪れても飽きないまちです。